こしやの光

小經の巻

前編

三昧に入れ……一
三昧の練習……三
自己人格を無視する勿れ……五
五濁……七
如来光明と日光……一三
太陽と如来光……一三
光明は見えねども觸る……一六
清浄光……一五
満月の如き人格たれ……二〇
人格改造の清浄光……二〇
人は改造すべき精神的生物……二三

後編

佛説阿彌陀經……二五

三味に入れ

三味と云ふは梵語にて等持定と譯す。佛法に無量の三味あり。念佛三味法華三味華嚴三味等何れの三味にても三味に入るには自己の精神全體を佛の中に沒頭して餘念なきに至れば我を忘れて其と己と一體と成つてしまふこと何事にてもそこに到らざれば妙を得ることは出來ぬ。それには精神が散亂して居つてはゆかぬ。是非統一せねばならぬ。禪宗にて坐禪を修するも先づ初めに精神の統一することを練習する故に能く禪を修めたる人は何事を爲すにも其の方に全心を投じて餘念なく事業を爲す故に其仕事が完全に出來る。故にこの三味即ち精神の統一はよく習ふべきことである。其れには必ず眞面目でなくてはならぬ。三味に入らざれば其の作す事が完全にならぬばかりでなく其業を爲すに興味を感せぬ。三味に入れば自己の精神が其中に沒頭して餘念なきが故に其れに深く入る時は深く妙趣を感じらる。卑近の例なれども劇を好む人が其の劇場に臨むや其舞臺に演じて居る其狂言の中に精神が沒頭して我を忘れて居る所に其内心に深く興を感じて居る。其の如くに何事にてもさうである。

今念佛三味を修するも全心全幅を如來の大慈光の中に投じて心々相續して一へに念を投じ全く我を投入し、古人の、月や我我や月やと分かぬまで心にすめる秋の夜の月といふ一心に物の中に我を投け込んでしまうて全く無我の狀態となりたる所の妙趣を感せらる。念佛三味のみでなく朝夕の禮拜に如來を讃唱するにも讃の中に我を投して其に神が入る所に妙趣にいたる。

たとへば如來歡喜の光明に我らが惱みも安らぎて禪悅法喜微妙なる快樂きはなく感ずなり、と讃唱する時に唱ふる聲に心を誘はれて識らず〳〵に其靈境に入ることを得。其靈境に入る時は言ふも言はれぬ妙趣を感じらる。何事にも事を爲すには深く興味を感ずるに到らざれば其中に生命を見出すことは出來ぬ。其實境に觸れて生命と爲らざればまだ三味と言ふに足らず。

念佛三味また讃稱三味何れも自己の精神が全く其彌陀の實境に觸れざれば活ける念佛にあらず。また一心に讃頌を唱へて、甚深難思の光明を至心不斷に念ずれば、と頌ふ時に我心も此中に沒頭して稱ふる聲に導かれて自然に彌陀の光明中に融け込んでしまふ。こゝに到りて彌陀の靈境の中に眞の我と生れ我彌陀の靈に活くるに到る。こゝにいたりて宇宙に周遍する彌陀の大靈と我が心靈との融合する所に我も活き彌陀の實在も此處に顯現す。こゝを三味の境と名づく。

何人も心靈具有せざる者はない。只至誠深心を以て三味を修すれば必ず妙處に達すること疑なし。

三味の練習

すべて何事にても其業を完成し妙所に詣らんと欲せば至誠熱心に精練を要す。いかに立派な天資の良材たりとも之を完全に發揮すべき精練するにあらざれば其資性を完

成することは出來ぬ。喩へば鑛物中の最貴重なる金剛石と云へども充分に琢磨するにあらざれば本性の光輝を發することが出來ぬ。人は各自本能に於て彌陀の日光を反映すべき心靈の寶石を具して居る。彌陀の靈光に融合ふてそが靈に活き靈の妙味を感じ身は娑婆に在りながら極樂の至美至妙の快樂を感じ得らるゝ性を有つて居る。人々極樂に生れて淨土の快樂無比なるを感じ得らるゝ性を有つて居る。故に極樂に生るゝことが得らるゝならん。然らば必ずしも此身の命終らずとも、心神を彌陀の中に沒頭すべき念佛三味を精修する時は必ず現身にて彌陀三味の至美至妙の快樂を感じ得らるゝ何ぞ疑はん。只須らく要ず一心に勇猛精進に練習すべきである。たとへ科學やまた技藝等にても一心に鍛錬して止まざれば必ず熟達することを得、殊に自己の靈性を發揮して大**ミオヤ**の無上至靈の光明を獲得すべき修行のために何ぞ一心を献げるに惜まんや。此一心の修行に依つて人は從來の非靈なる我より至靈の我に復活す。是人生の一大事である。若し心靈復活して彌陀の光明中に永遠に活きる目的なからば人生何の價値かあらん。我同胞衆に三味の修行を勸むる所以である。

自己の人格を無視する勿れ

君は今現に人間に生れて居ると云ふことは確かに信じて居るならん。抑人間に身を受けたのが宗教の必要なる所以なので、また宗教に依つて能く練修すれば心靈の光明發得できる可能性を有つて此世に生れたのである。君何故に自己の人格を無視して迚も我々は光明發得できぬと自棄する。若しか是が發得の可能性が具して居らねば人間に生れ來るべき筈はない。君は米を食ふはそれを消化して一分は同化して其血肉と爲し一分は異化して大小便にして排泄して居るではないか。其肉體が其れだけの働きを有つて居る如くに君が心靈に靈の糧を與へ小兒の哺乳して漸々に養育する如くに靈を養育せよ。必ず君が靈に活きる人となりて人生を眞に意義ある價値ある永遠の光明を得たる人と爲りて光明の生活に入るべきこと何ぞ疑はん。君聞き給へ。何人も人

と生れたるからは大**ミオヤ**の光明に靈に活くべき可能性を有する故一方に**ミオヤ**の實在を信じ一方には自己の一心の信仰に依つて靈に活きる可能性を有するを信じて教の如くに一心に念佛三味を修せば必ず成ずること疑なし。

但し靈の生活に復活せんに三の障害物あり。此が爲めに大概は靈に活きるの資格を阻害せらる。其三の障害物は何ぞや。經に憍慢と弊と懈怠とは此法を信得し難しと。此三は何れも靈に活きるの障である。憍慢なるものは自ら從來の動物生活を以て自ら得々然として從來の卑賤なる動物我なるを自覺せず故に自ら謙遜卑下して眞に高尚なる靈に活きんとの意志發らず。經に彼らは尊貴自大にして自ら横に道ありと謂うていかんとも降伏し難しといふてある。實に斯の如きの族は已に形は人形たりとも其意志が修羅道に墮していかんとも度し難き徒である。弊とは六弊とて、すべて心靈の即ち菩薩の麁はしき靈に活きんと欲する高尚なる遠大なる意志の缺けたる人を言ふ。換へて言へば靈的人格要素の資格の缺けたる人、弊とはヤブレたる即ち心の宗教心の器のカタワ者、不具者、心の眼耳無しの不具者のことである。世に宗教心の不具物の多いのは、一は是まで宗教が萎れて居た爲めに遺傳素質としても只肉欲の動物的肉欲の方面のみ發達した遺傳にて靈的方面に乏しかりし爲に弊族が多いのとおもふ。實に靈的素質の缺乏せる人間も度し難い。また三には懈怠である。心靈の精練は金剛石の琢磨である。なほ易い事業ではない。從來の肉の我に死して靈に復活するのである。全生命を献げて彌陀に投歸沒入して妄想我の皮殼から脱して**ミオヤ**の子たる靈性が**ミオヤ**の慈悲の光明に觸れて始めて復活するのである。

懈怠の族は靈に活くる資格のない族である。世に懈怠にして靈に活くる事のできぬもの程憫れなものはない。

五　濁

釋尊は現世界を五濁惡世と名づけ五種の濁流ありて人類を身體にも精神にも害毒を

興ふるものである。世界には滔々として此濁流漲りて人類を此の汚穢の中に塵殺せんとするの勢力あり。

之を根本的に救濟せんが爲めに釋尊は此世に出給へり。**ミオヤ**の光明によりて五濁濫沒の濁中より救度の道を敎へ給ふた。五濁とは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁是なり。

一に劫濁。　劫とは長時即ち時といふことにて終始有爲轉變少しも斷ゆる間なく遷り行く此の世の中は折々に種々の惡い流行が行はれて人の心を濁流の渦中に溺濫せんとす。譬へば戰爭とかまた流行病とか種々の惡弊の流行または騷動等の如きかゝる時に起り來る。濁流は相互に加はりて暴流の渦中に慘害を演出するは此世の免がれぬところ。されば佛陀世に出で給ふことは劫濁の世なれば

ミオヤの光明の下に自覺して此濁流に溺れて現在より未來永遠の闇黑に墮落せぬやうに劫濁の世と云ふ標榜を立てゝ此の時々の流行濁濫をば、**ミオヤ**の光明の外には此の禍害を免るゝことなきことを敎へ給へり。

二は見濁。　見とは人の心靈の目が無くて靈覩、未來覩、宗敎覩、成佛覩などゝ云ふことは眞闇にて見えぬ衆生のことなれば如何に心を用ひて成佛すべきや、またいかにせば六道の輪廻なるかも、過去も未來も闇くして分らぬ凡夫同志のことなれば、實際分りもせぬのに分つたつもりで人は死せば魂は天に還へり魄は地に歸すとか思ふなり。また人の靈とて物質の細胞の外に別に有るものでない。故に人の生殖細胞が兩方から合うて一個の人と爲つたのであるとか、種々の見こみの誤からまた誤まられて皆濁流に溺れて闇の中に墮つてしまふ。是に於て釋尊世にお出ましなされて衆生の心靈の大**ミオヤ**の光明を仰ぎて各自の心靈の眼が開くる時は始めて人生の眞意義もわかり現在より永遠の光明に入るべき眞理を敎へ給へり。衆生よ、汝等はみな見濁の世にありて濁流に濫溺して永らく沈淪してはならぬといふことを示し給へり。

三煩惱濁。　是は人間も本々動物である。依つて動物欲は本能的に有つて居る。貪欲瞋恚愚痴を本として一切の動物欲をもつて居りて而して意識も發達して居る。只牛や馬のやうに只本能的の欲でなく惡るゴスイ意識を惡用して動物欲を逞ましく働いてゐる。故に是非とも宗敎が無くてはならぬ動物である。されば釋尊は世に出で世は煩惱濁の世と標し給ひしなり。

ミオヤの光明に依つて、此の濁濫の渦中に卷きこまれぬやうに敎へを垂れ給うた。

世尊の御敎によりて**ミオヤ**の光明に靈化する時は煩惱も變じて喩へば澁柿の實も甘干しとなるが如くに靈化する時は人生の妙味窮りなきを感じらるゝに至る。

四に衆生濁。　衆生とは即ち社會である。衆生が繁殖すれば益社會が濁濫して種々の黴菌が發生して相互に競爭して强者伏弱種々の紛擾を起し、黨を組み派を立て、風を發し波を起して只己を厚くせんとし、他の汗膏を絞りて己れが肉を肥さんとし風敎を亂し習串を汚し濁濫極りなし。

されば世尊は此世に出で給ひて社會を濁濫の渦中より救ふ光を與へ給へり。衆生相互に於ては濁るもの、各自の精神の奥底に大**ミオヤ**より受けたる靈性あれば御敎に隨ひて**ミオヤ**の光明に照されなば各自は相互に同胞の眞を得るに至らむ。これ此世は宗敎の要ある所以である。

五に命濁。　命は即ち生命を保存するにつきて起る濁りにて是生活より起る弊害である。生存の競爭激しく生活難よりして知慧を惡用して動物的に活きんとするは凡夫の弱點である。

全體この生命は、**ミオヤ**の賜にして永遠の光明に向上すべき人生なるを自覺せずして狡猾なる動物に活きんと欲するもの敎を受けざる時は昔々爾りと云ふべきである。貴重なる人生を空しく闇黑裡に葬り去る如きは實に憫むべきの極みである。されば佛陀世尊は此の濁濫より救ひ出さんが爲めに世に御出ましになりしものなれば

ミオヤの聖意に叶ふべき價値ある生命とし、永遠の光明に到達すべき人生の眞理を敎へ給ふた。此の世界を五濁惡世と標榜を立て人に知らしめ給ふた所以は此世は五濁

であり て仕方なき世界と厭惡して仕舞へといふ意味ではなくして宗教の必要ある世界であることを自覺せしめて可惜人生を五濁の渦中に溺れて未來永遠の闇黑に向ひ生死の暴流に流轉して極りなきを憫み一切の人類を斯の如き五濁濫漫の中より救濟せんために佛陀は世に出で給ひしなり。

如來の光明と日光

如來の光明は何なる相と能とを有てをるかなれば、此私共の身體は太陽の光明に活されてをる。若し太陽の光なかりせば此身體は活きること出來ぬ。

私共の心靈は如來の光明を受けて靈的に活きることを得る。如來の光明に對する觀念は太陽の光にて萬物活ける如く如來の光明に依て清き信仰心が活る、即ち永遠の靈的生命は如來の光明に依て活ることである。一切の生物が太陽の能光に依つて動物的に活かされてをる如く、如來の光明は人を聖靈的に活かす能力を有つてをる。

太陽と如來光

如來の光明は超日月光と申して太陽の光よりは高等である世には太陽に超えたる光明何れに在るやを問ふ人があるけれども、如來の光明は肉眼に認むることができ

ぬ。が其光明を被りたる人は精神的に靈的に活きて只太陽の光にて動物的に活きてゐる計りでない。如來の光明が太陽の光明に超へて高等であることは何に依て證明せらるゝとなれば、日光と如來の光とは物質的肉眼を以て比較することは出來ぬけれども其光明を被りて養成せられたる人の精神に於て證明せらる。日光は人の動物的の形骸を活すけれども人の精神を靈化して高等なる信仰の生活に入れて清き人として活かすことはできぬ。古今に亙り靈的偉人の最も圓滿なる人格は如來の光明に依て靈化せられたる結果に外ならず。

光明は見へねども觸るゝ

春の氣候は天より來るも見へねども春來れば暖溫なる和氣が徐ろに到り新綠萠發しまた蕾の芽生して花開くが如く如來の光明は眼には見へねども只だ如來は實に在ずことを信じて一心に念佛して至心不斷なれば漸々に光明に觸るゝことをう。然る時は自然に自己心中に發現し來る靈的氣分は春の氣候に萠發する芽生の如くに一種云ふべからざる靈的氣分有り難いと云はんか歡喜と云はんか、この喚起し來る心を信心喚起と云ふ。故に經に其衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ずとは斯如來の光明に觸るゝときは人の心が一轉して靈性の生れ來る心理狀態を說き給ひしに外ならず。

古人が、秋來ぬと眼にはさやかに見へねども風のおとにぞ驚かれぬると詠し如く、如來の光明とて眼には見へぬ、然れども只如來の大悲を憶念して一心に念佛して心々相續至心不斷なる時は、天地に漲ぎる如來の靈的光明に自己の奧底に伏する心靈に一種の靈的氣分が滲きて、秋風の寂寥を感せし如くに實感し來るのである。

淸淨光

念佛の一行と十二光。行は一心に彌陀一佛を念じ自己の一心統一してまた能念所念

とて自分の心が彌陀を念じて彌陀の外に我念なく我念が即ち彌陀にて彌陀が即ち我心となるやうに、一心一行漸々深く進むに隨つて我心と彌陀と離すことのできぬ心の狀態である。喩へば炭に火が燃つりし時炭全體が火となり火即ち炭を燃す如くに、我心の闇煩惱の炭も彌陀の光明を念じて念々彌陀に相應する時は煩惱の炭も如來光明の心と化す。これを念佛心と云ふ。然れば即ち一心念佛一行なれども一行の念佛によつて心が彌陀の光明化する時は心の體は本一なれども光明に化したる心の相は種々の方面に觀せらる。人の心は本一體なれども四類に分類することができる。感覺と感情と知力と意志とである。感覺とは眼で視、耳に聽き、鼻に嗅ぎ、舌に味ひ、身に觸れて起る處の心の相にて之を佛教にて眼に色を見わけるを眼識界といひ耳に聲を聽覺するを耳識界といひ鼻にて嗅覺するを鼻識界と名づく、すべて此れを五根と云ふ。一體凡夫の心は此五根の爲めに眼にて嬋娟たる峨眉紅顏を視れば忽ちに執着の念が生じ、即ち眼の慾耳の慾口腹の慾抔の爲めに惑かれて、此色と聲と香と味と觸との五境に對して六根が常に染さるゝ故に六境を六塵と云ふは人の五根を通じて心を染汚する故に六塵と云ふ。日々の見聞覺知から心を汚すことは常に斷ぬ。

例へば人の身體は活きてをる限りは肉の分泌物か毛孔から分泌するのと亦外から塵埃が附着するのとで垢穢が常に身につく故に清き水または溫湯を以て垢を洗濯するの要あり。

また衣服にても敢へて能く垢を附着せざるとも自づと衣物に垢がつく故に洗濯して之の垢穢を除きて清潔になれば氣持よくなる。外の垢は感じ易きが故に之が洗濯の必要を感ずるけれども心が常に六塵から染汚さるゝ垢は中々に強くして、また體に身體や衣服の垢よりは人間の最も貴重なる人格の上に及ぼすことなれば實には最も心の垢を淨めて六根清淨にして人格の光輝を發すべきなれども、そこが凡夫の淺ましさである。顏面や外皮膚の垢つくのが他見を憚ることは感じ易きなれども己が心の垢が自己の本心に對して慚愧の感が少なきは是れ人の心の淺間敷ゆへなり。こゝが凡夫と聖

人との異れる處なり。

常恒に眼前に在します如來は我等が肉體の面を見給はず我らが心を照らし給ふ故に我等は如來の御前に慚ぢまた己が心靈を愧づ。ア、實に我らは淺間しき凡夫である、自ら人格を高等に進ませんとはせで自ら肉欲の奴隷となり六根より六塵の爲汚されて夫に愛溺して自ら清淨高潔の心をたもつこと能はざるは實に野卑である。

されば遺經に常に五根を制して放逸にして五欲に入らしむること勿れと。五根とは、眼耳鼻舌身にて五欲とは眼に色を視、耳に音を聞き、鼻は香を嗅ぎ、舌は味をしり、身は物に觸る。此の眼や耳より肉の快樂を貪ぼるを五欲と名く。平生に愼みて能く五根を守りて能く制裁せよ譬へば牧牛者が杖を執つて之を視して縱まゝに人の苗稼を犯さしめぬやうにせよ。若し此眼の欲耳の欲を縱にせば唯五欲の將さに涯畔なくして制す可からざるのみでない（五中一例を擧ぐれば口の欲酒飲の如きは是酒が始めは少量にても醉ふて愉快を感ずるも刺激に抵抗する性が有る故に漸々に發達して終には多量に飲まざれば醉はず段々に昂進して屢々飲酒する時は習慣性と爲りて必需とて無くてはならぬやうに爲りまた病的となる而するときは酒の氣がなければ體も持たぬやうに爲る其の害は身體の機能を毀損して病氣となりまた其の毒を遺傳して子孫の體質を病的にするが如き）遂ひには如來より禀けし自己の靈性を滅亡ぼして再び靈に活き更へるてふ時期を失ふて仕舞ふのはまことになげかはしき次第である。

如來の清淨光は人の五欲の爲めに汚さるゝを救濟する大なる力を有つてをる。

凡夫の習ひとして五欲の爲めに自己の人格が墮落しまた衞生等にも甚だ害あることを知り乍ら自らの力で之を改正することが出來ぬ。また概くは自暴自棄に爲つて迚も自分で人格の改造ができぬ。夫は自己の靈性が永遠の生命を信知せぬ故に自分を只此動物的生活の方面から計り認めて居るのである。

自己は尊き靈性を有てをる。清淨光に依て清められて日々に六塵に汚さるゝ六根を清淨にして、自分の此眼に來たり與へられたる清き眼である。眼の欲の爲めに惑は

されていかに翠黛の蛾眉の爲めに惑はされて人格墮落してしまう如きは汚らはしいことである。

清き光よ我らが眼を淨めてあなたの眼の如くに清くして給へよ。

清淨皎潔にして滿月の如き人格たれ

人は此人品即ち此形骸の上にはいかに立派なる、即ち在原業平、平井權八など丶形骸の上から世に稱せられたるも其の品性に於て皎潔にして珠の如くに光彩を放つべき人格にあらざれば何んぞ云ふに足らん。實に現代の青壯年の志氣は明治の物質の文明進歩が只物質の方面にのみあせりて、品性の内的改造するに追ない程であつた爲めに内部の道德的人格を造る方は外部の進歩發達には比較にならぬほど劣つてをる。

人格改造の清淨光

如來の光明獲得の目的は自己の人格を改造する處にあり。人類は他の動物と異にして必ずミオヤの光明によりて自己を覺醒してあるべきやうに自己を指導し改造して光明の中に生活すべきものである。否な光明の中に入るが故に人格が一轉するのである。

他の動物は本能的に眼の欲耳の欲また色食の欲でも本能的で、換へて云はゞ天から與へられた丈を正直に守りて食物でも飢うれば食ふて飽けば止めて敢て人間のやうに貪らぬ。また生殖の本能にても春期が至ればたとひ狂ひ爭つて色欲を逞しうせんとするも其期過ぐれば其欲も止む。人間は天の特寵を得るとも云はんか自由を得るが如きまた智惠も進み意志も自由にてすべて心の作用が發達してをる丈けに、自から能くあるべきやうを覺りて色食の欲にしても清淨に自ら分を守り節を保ちて清淨にせざれば天賦の體質を傷ひ動もすれば生命をも促むるに至る。

自己の身體及び五根及び一切の生理機能は即ち口腹の欲を恣にする爲めに胃腸を

傷ひ消化器を害するやうなことをせぬやうに自ら能く覺りて清淨にせよ。一切の食物は生命を養ひ、自己に賦與せられたる天職を全ふする爲めに與へられたる身體及び一切の機能を完全にして而して此世に出たる天分に叶ふやう力の有限り努力して清淨自活してミオヤに報ひ奉るべき使命に用いる身を只美味を貪り酒に耽りて他くことをしらず、闇黑の中に沈淪して不淨不潔の身となり病を求め命を縮む如きは實にミオヤに對する仇といふ外なし。人類には夫が爲めに理性と云ふ智慧を以て生理上の智も道德上の智も能く明らかに識らるゝやうに智の作用を賦與せられをるにも拘らず只其のミオヤの使命を果すべく人格を高尚に殊勝に進ません爲めに與へられたる智慧を還つて惡用して只智慧を以て動物欲の本能を逞うせんとするが如きはミオヤの聖意に叶ふ筈がない。

清白皎潔にして生活せよ、是れ清淨光裡の生活である。

人は改造すべき精神的生物

犬馬の如き動物は本能的にして自己の本能のまゝに發達してゆけば犬は犬の本能の働き馬は馬の本能あり、人間も動物であるから一方より見れば動物的の本能の性を有てをる事は異らざれども、人類は食物にしても料理をして食ふごとく之れを消化する機能に於ても人間的に習慣性を爲してをる故他の動物と同じからず。人間は生れたまゝの本能計りでなく終には理性の如く學修によりて修業の結果として高等なる知識の働きを爲す。他の動物には理性が發達して居らぬ故に人間の如くに學業を以て知識を磨く必要がない、人類は動物と異にして學業を以て修練せねばならぬ理性を以てをる。

例へば鑛物の類にても素朴なる石の如きは天然に自分に有てる朴質のまゝにて還つて風致の見るべきあり、朴石を琢磨するも光を放つべき性なきのみならず還つて天然の風致を破壞して了ふ。然るに高等なる寶石や珠玉に至つては充分に琢磨して始めて

其の有せる最も貴重なる性質を發揮して光輝燦爛として光を放つ如く、人類の頭腦に潜伏せる寶石は之を琢磨して實に尊重なる本性の光が發揮す。人は唯教育を以て理性の知識を研くべき斗りにあらずして其の奥底に有せる靈性は人類の頭上の王室にして之を開發し其の靈性の光を發揮して始めて人に萬物の靈長の德性が顯はるゝなり。

天より賦せられたる人の頭上の玉座に嚴臨すべき靈性は是を佛教にて佛性と名づく人は佛性を開きて、この光を以て自已の動物性を自から制裁し指導して光明の大道を如實に行爲すべきである。

佛說阿彌陀經

佛は梵語即ち佛陀、華には覺者と譯す。是に三義あり、一に自覺、二覺他、三覺行圓滿。自覺とは自ら最圓滿に開覺せる義なり。何をか覺なる。今覺りとは要を取りて云はゞ即ち最高等の宗教的客體阿彌陀佛陀の體用を圓滿に覺悟せしなり。覺悟と云はゞ宗教知力にのみ關する如く聞ゆれども、其實知力的のみならず、心情的に解脫融合し、意志には神靈同化として最完全に完圓滿に成就したるを自覺と名づく。二、覺陀とは自己の神靈同化の結果として彌陀の實現に活動し、宇宙解脫の目的を以て一切を攝取同化の實行行動を云ふ。三、自己の如くに衆生を悉く彌陀の勢力によつて神靈同化せしむる處のすべての機關成就しこの勢力をもて宇宙解脫の目的として將來に於ても此意志流行し一切を同化成就したる究竟圓滿と名づく。

牟尼佛陀は是れ宗教的關係には主體なるや將た客體なりやとの疑問に就ては、外面より見るときは最高等なる宗教的心機の開覺者にして、人身を以て靈格彌陀を表彰すべき生活活動し彌陀の實在を實現したる先覺者なり。內面より云はゞ客體なる彌陀の實在と心機的致一し解脫し神靈同化したる大精神なり。是衆生の爲に主體と客體との調和者なり。內面より云はゞ釋迦即ち阿彌陀佛なり。阿彌陀の眞理を離れて宗教意識なければなり。故に此教に、我今阿彌陀の不可思議功德と說、藕益師解して「是諸佛釋迦皆阿彌陀を以て自と爲」とは是の意なり。又法華には我本來無量壽なることを說給へり。是圓滿一乘の修多羅には牟尼の內面即阿彌陀にして、阿彌陀は絕對的統一の神靈にして釋迦及び諸佛は是個體の彌陀なることを知るべし。

說とは、要解に說とは所懷を悅しむるなり。佛は度生を以て懷とす。衆生成佛の機熟すれば爲に難信の法を說て究竟して脫せしむ。故に悅なり」と

阿彌陀とは是客體の神靈格にして、其本體時間を超絕し、空間を超へ、心慮の及ばざる所言說の能はざる處、實に不可思議の體なり。其體非時間非空間の消極的のみならず、一方には積極的に遍時間遍空間實體として實在せり。是らを法身とし、(二)實體は無相なれども無相の相は相として相ならざるはなし、外には塵沙の相好をもて莊嚴し、內には一切智一切能神靈公正慈悲等の屬性を以てし、至眞至善至美虛靈眞理の最高等なる處に臨御し、至德圓滿して缺くる處なきを報身と名づく。また(三)無上の威力と無限の慈悲をもて十方法界の衆生を度脫せんが爲に種々の應身を現して濟度し不可思議の妙用あつて無作自然の業用として常恒に衆生を攝取同化する勢力之を彌陀の用とす。また應身と名づく。一言以て彌陀の用を詮表すれば無量の光壽不可思議公正の精神態に攝取同化せんとの神靈態に外ならず。

經とは一切金口名づけて經と爲と。

如是我聞。如是。如は客體阿彌陀神靈不可思議の德と恩寵をもて衆生を攝化する德用を云。是とは自已を脫却して衆生信仰彌陀を信じ、解脫靈化の理決定して非なきを是と曰ふ。

要解「實相我に非ず、無我に非ず、阿難假名を壞せず。故に稱して我とす」。阿難恩寵獲得し已れば我即ち阿彌陀とす。阿彌陀の外に眞我なきを以ての故に。要「耳根耳識を發し親しく圓音を聽く」と。空の空に即するが如くなるを聞と名づく。

一時佛在舍衞國祇樹給孤獨園與大比丘衆千二百五十人俱。

法會時處。大衆同聞に三類。一聲聞衆。二菩薩衆。三天人衆

時會の三種は彌陀の恩寵によつて解脱靈化せられたる宗教主體の方面を表す。

一、聲聞は主體の消極的方面にして彌陀の實在と關係に適せざるもの心理に知力に於ても心情意志にても悉く排除し脱却せるに。二、菩薩とは消極的解脱のみにしては未だ圓滿なる宗教主體といふに足らず、進て積極的に彌陀の恩寵によつて神聖態に同化したる精神に名づく。三、天部衆は已に恩寵獲得の結果内面に靈化の活動行爲のみならず、天の護國利民の德に准して社會の爲め國家のため竭すべき志想を表す。

一、初に聲聞即ち主體消極の方、蓋し天然の迷的素質を脱却して聖靈に適せんとす。

此の聲聞の教理に四諦の法あり。一、苦諦。二、集諦。三、滅諦。四、道諦。苦とは即ち三苦。謂く、苦々、壞苦、行苦。三界二十五有。即ち六道生死は悉く苦なり。二十五有とは四洲と四惡六慾梵天四禪四空處無想五那含なり。下地獄より非想非非想天に至るまで苦樂同じからずと雖生死の苦を免るゝこと能はず。

二、集諦とは見思の惑。見惑には身見、邊見、邪見、取見、戒禁取見、是を五利使と云。貪瞋痴慢疑是を五鈍使と名づく。此十使を三界四諦の下に於て增減不同ありと雖ども總て八十八と成る。使とは驅役の義、能く人の心神を驅役して三界に流轉す。故に通じて使と云ふ。思惑に八十一品あり。三界九地即ち欲界四禪四定を共に合して八十一品。」

三、滅諦。前の苦集を滅して、偏眞の理を顯示す。滅は滅無の義、結業已に盡れば則ち生死の累ひなき故に滅と名づく。

四、道諦とは四念處、四正勤、四神足、五根、五力、七菩提分、八正道分、聲聞の位

階に二等あり凡と聖。凡に二。内凡外凡。内凡に四、一煖と頂と忍と世第一法。聖位に三道。見道、修道、無學道。四果、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢之を四聖位と爲す。

是の如く數等の階級を立といへども要する處人の心機に具有する天然及惡習性を解脱する程度。

今斯教にては自己の力を以て解脱するに非ず。現に彌陀の恩寵によつて解脱するなり有らゆる煩惱脱却するに非ざるも煩惱の原動力たる主我が彌陀に歸服するが故に其枝葉たる煩惱自ら滅すべき理なり。

斯教に於ては人が自己の力を以て之を脱却せんことは能はざる所、但彌陀の恩寵によりて解脱することを得と信ずべきなり。此煩惱に於て三界二十五有を立るも此無形の心理を世界的に表彰するに外ならず。

二、菩薩

要解に菩薩摩訶薩此には大道心成就有情と云ふ。乃ち悲智雙べ運び自佗兼利の稱。先に聲聞を舉て宗教主體消極的方面は解脱としての德を顯すも積極的方面彌陀の恩寵によつて神聖正義智、神靈同化の主體を菩薩の稱をもて其德を表彰す。

菩薩は消極的解脱のみにては未だ圓滿なる宗教主體と云ふに足らず猶進んで恩寵によつて神聖圓滿なる聖德と靈福を以て、聖靈的性格として、健全なる精神的生活を遂げ自ら靈化せるのみならず一切衆生を彌陀攝化の恩寵に誘引し同化せしむる職分を盡すにあり。菩薩初發心曄曄の曉旦より等覺に到る過程に五位五十一地の階級を立るは彌陀の觀念目的に接近する程度を顯はす爲なり。彌陀神靈同化としてはいかなる實行行動をもて彌陀の意志實現を活動すべきや。またいかなる菩薩の天職を果さゞるべからざるやは、無量壽經によれば、内には諸の菩薩無量の行願を具へて功德の法に安住し（内に神聖靈化の德もて彌陀に安立し）十方に遊歩し權方便を行ず（外に彌陀の目的を自己の目的として行動す）佛法藏に入て彼岸を究竟す（内心彌陀と致一し）於無量

世界現成等覺（彌陀の意志を實現す）

是より聖靈の活動せる狀態を敎祖釋尊の八相をあげて彌陀靈化の實現を知らしむ。

敎祖の如は人格として最完全圓滿に彌陀の意を實現し最圓滿に生活活動遂げたまひしも各自は自己に實現したる限りを竭して而して止む。罪惡の凡夫自ら此德を有すに非ず彌陀無上の慈悲あつて衆生を靈化して活動せしむ。人は罪惡の凡夫なるも彌陀に無限の威權と慈悲とありて之を攝化したまふ。此恩寵を獲得の爲には一歩も返すべからず。已下靈の活動を示す。

處兜率天弘宣正法

（實在當に現ずべき恩寵の喚起）

捨彼天宮降神（母胎彌陀の靈を來すべき豫地として恩寵の遺傳の素因として）現行士步光明顯曜普照十方無量佛土六種震動（罪惡を脫して靈に喚起の心稍動く。靈を迎ふ喚起動く。不識的に彌陀を憧憬し）

舉聲自稱吾常於世爲無上尊

（內心に聲あり。我まさに彌陀の同化の神靈態たらん）

釋梵奉侍天人歸仰

（理想高遠なるが故に世間の貴族の及處に非ず然して世間百科の學術技藝悉く修め精修研究して試むるあらざれば其功能のいかゞを知る能はず。故に當時のあらゆる學藝を修む。

示現算計文藝射御博綜道術貫練群籍遊於後園講武試藝

（次に又世間人事五欲の境に入りて親しく試みるにあらざれば其功過のいかゞを察するに緣なし自ら經驗するにあらざれば罪惡と苦毒の關係を感ずるなし。）

現處宮中色味之間見老病死悟世非常。

（世間五欲の榮花の春の夜夢にても見なされしが忽に驚駭して目の醒覺する動機となりしはこゝに於て深く思考するに已に曾て學びし處の學術もこの世界的機制の束縛に

かゝる老病死に對して之を防禦し之を滅殺せんとするも決して能ふべき道なし。算學に精通するも我願ふ靈界は有間界に非ずして生死を超絕せる靈界は無限の數量の及ばざる處なればなり。百科の學術も有形の事理を知るべくも超然たる虛靈眞理の不可知の妙境を知識了解の範圍を超絕したればなり。弓馬は自己煩惱の惡魔と外六賊を對治すべき器具にあらず。道術も暫く肉的生を養ふべく聖靈の生命を保養すべき術にあらず。文に於て神靈を顯はす緣なし。武自己の惡素質を即ち煩惱を滅殺する能はず。紅顏美蓉は凡愚を醉はしむる榮華の夢は靈の醒覺を障る。

古來蓋世の學者賢哲一世の勇者も皆悉く無常の爲に塵殺を免るなし。此天然の世界的迷的規定を超絕して適に虛靈眞理の神界に入るにあらざれば此世界的魔縛を脫する能はず。）

棄國財位入山學道服乘白馬寶冠瓔珞遣之令還捨珍妙衣而著法服剃除鬚髮

（靈に入らんには先づ世界に依屬せる心を脫却せよの入山學道自己心理の根底に向て靈を求めよの服乘白馬寶等主我をすてゝ靈たらんには捨珍衣而著法服靈を莊嚴すべきにあらざるを捨てゝ靈の慚愧衣を着す。剃除髮、我慢主義を排除して彌陀に歸せん。）

端坐樹下勤苦六年行如所應。

（天然の主我を斷滅せんが爲に專念に凝神し天然の罪惡煩惱の質を認識し人は自己に天然の根本惡質を具するを認識せず。已に神的觀念によりて自己の惡罪を認識し之を脫せんが爲にはいかなる苦も忍ばざるべからず。）

現五濁剎隨順群生示有塵垢

（自己本能の惡に對する反情本能的格惑的素質を自ら賤惡せる故にこの惑的心を洗除す）

靈禽翼從。

（從來の主我主義を自ら棄厭す。心自ら靈に向ふ。內容自ら禽獸に感せしむ。）

吉祥感徵表章功祚

（當に來らんとする靈に對する徵兆）

奮大光明使魔知之魔率官屬而來逼試制以知力皆令降伏。

（欽慕の心裡に一點の靈光顯はれんとする徵候あるや、頓に心界無邊の內容動搖して止まず天然の自己を離脫して彌陀同化に融合せんとせば主我の魔王自ら安ずる能はず魔王の補相たる我執我見我慢我愛の譜代見思百千の眷屬を悉く斷滅して此心城を彌陀法王子の府とせんとするも、主我の魔王及び臣の煩惱は黑暗界に城廓を構へ管ら傲慢放逸にして彌陀を畏敬するなし情欲を放肆にして威權を貪り虛名を爭ひ利を貪り自ら任ず是この傲慢無賴なる情操をして彌陀制御の下に服從し此の規定の下に靈的生活を遂げしめんとするに際し主我の恐怖一かたならずいかにもして在來の主我主義をもて傲慢的生活を遂げたき情操。）

以智力。

（自己主我の魔王甚だ服しがたく外圍に六賊の繞れるあり。自己機制の中にもろ〳〵の魔あり。上天下地悉く魔軍ならざるはなし。いかゞせん。之を擊破せんとするも自己の力及ばざる處、唯一道の光明のあるあり。彌陀の恩寵の有るのみあつて之に歸せざればいかでか元の天機を脫却せん。

得微妙法。

（付て一道の先驅たる曙曛あり。彌陀の觀念に凝神し、すべての意及び感情の忘想忘觀等を蕩盡し、彌陀一心の外には受想行識悉く滅盡し、天然の擾動する同分の生機倏然として墮烈し衆生業の潤源脈感應全く懸絕し、靈界の天將に明悟せんと、將六根虛靜にして復馳逸內外湛明にして入に所入なく、身心瑠璃の如く、內外明徹なり。之を彌陀の靈光に攝と云。忽ち無明の夜迷の夢朗然として覺むれば盡十方無礙光如來顯然たり。主我を彌陀大圓覺に投歸し融合したるのちは主我は彌陀に歸伏し自己離脫の時には彌陀の外に我なし。正に神靈同化の精神となりて是よりは彌陀の目的を自己內容の目的として終局目的に向て行動しこの目的の爲には生命利害をも犧牲に供せざるべ

からず。）

釋梵祈勸請轉法輪。

（今は心界の天地頓に開化し昔は主我を主とし魔王の旗下に驅役せられたりし惑奴的生活轉じて、今は無礙光無上の慈悲と正義の指導の下に行動し自己心裡の梵釋が自己心內の彌陀の意志實現せんことを祈勸す。）

以佛遊步、佛吼而吼、扣法鼓、吹法螺、執法劍、建法幢、震法雷、曜法電、樹法雨、演法施、常以法音、覺諸世間。

（先には自己個體解脫に勇猛なる健鬪に勝利を得、今は進で大義戰を起して所有世界所有衆生悉く彌陀の慈悲の光の下に靡伏せん爲に、すべての惡と邪との神靈に反對せる精神を折伏し、この世界をして悉く心をば靈界の至善美化せしめん戰爭は天帝とアソラとの擊戰もたとふるに足らざるべし。

一切衆生心機として絕對的根底統一的彌陀に歸せしむるのみにあらず。各自は神聖公正同化の勢力をもて個體ながらに彌陀の實現として行動せしめんと。昨日までは主我的魔族なりといへども今日にして歸化する時は意志の內容神靈化とてまた展轉して魔兵を滅殺する勢力とならん。）

摑裂邪網、消滅諸見、散諸塵勞、壞諸欲塹。

（衆生の心理にある惡魔が靈界に對して戰はんとする處を、悉く破壞して彼をして戰ふべき機なからしめんと（　）らは精神生活に惡魔の旗下に活動すべき器具なれば魔的生活に必要なる素質此らは衆生の知力と感情との中に於て宗靈を拒絕し益々黑暗界に陷溺せしむるもの、消極脫却せしむべきものなり。）

嚴護法城開法關門。

（自己彌陀靈化の意志として情操をして金剛の如くに鞏固にし、心を彌陀に安立して法城を嚴護して六賊のために侵されず。八風のためにも動搖せず。鞏固なる情操なりまた彌陀の法門を開きて一切の衆生の精神をして靈界に入らしめんと欲す。）

洗濯垢汚。

（人は天然としてはこの罪惡素質の垢汗被らざるものなし。聖のバプテスマを以て之を洗濯して聖靈を顯すには自己及び佗のため煩惱の垢汚の洗濯に常に注意せざるべからず。

顯明清白、光融佛法、宣流正化、

（またよし自ら靈化の顯明清白なる意志と彌陀融合の心情にして、（　）化をも同じく正化せしめ己がためにこの正化を施す。）

無量諸佛、咸共護念、佛所住者、皆已得住、大聖所立、而皆已立。

（靈化したる內面心性なり。甚深の內容は已に形式的には統一なる彌陀と機能的に致一し諸佛は同じく統一なる彌陀の化身なれば何れも先覺者として同一分類を愛護す。

佛の所住は內面にては現象界の根底なる彌陀の不可思議的實體の中に安住し大聖は何れも皆な虛靈眞理最甚深なる彌陀の神靈界に安立せざるなし。

如來導化、各能宣布、爲諸菩薩、而作大師、以甚深禪慧、開導衆人

（內面には上の如くに自ら安立し衆生を同じく神靈同化のためには自ら模範となりて甚深の禪慧とは自己の根底なる實體的彌陀觀念に凝神せしめて神靈同化。）

亦無所作、亦無所有、不起不滅、得平等法。

（內面的實體の消極的方面は非空間非時間にして）

具足成就、無量總持、百千三昧、諸根智慧

（內面に彌陀致一の靈德として積極的方面にはまた無量の聖德豐備して缺くる所なし）

超過世間、諸所有法、心常諦住、度世之道

（天然を超絕して內面彌陀に神靈同化の實現として衆生をして悉く攝取同化し彌陀無極の精神界に度せしめんとの觀念に住してうごかず。）

於一切萬物、而隨意自在、爲諸庶類、作不請之友、

（實行的（　）結果としての事業、菩薩は自己を目的に（　）して客觀的世界脫を以て目的とし虛空法界も盡きんや我願も亦是の如くならんと。）

受持如來、甚深法藏、護佛種性、常使不絕

（心機致一の心に彌陀の屬性なる一切智能公正神靈慈悲等を機能致一的に受持し、諸佛種性はこの佛種性を開展し、共實在を展轉して傳へて絕ざらしむ。）

興大悲、愍衆生、演慈辯、授法眼、杜三趣、開善門、以不請之法、施諸黎庶。

（彌陀の實現として大悲を興し衆生を愍み慈辯とは恩惠をつたふ（　）法眼は心機開展せしむ恩寵によつて惡を脫却し靈に入らしむ。）

如純孝之子、愛敬父母、於諸衆生、視若自己。

（諸の有信に告ず。彌陀を念じ、信開展し彌陀の意志實現せんことを祈り、實に彌陀同化の意志たらば衆生視ること子の如くまた自己の若し我ら衆生を見ること孝子の父母に於る如くまた自己の如くなるや否や宜しく三省して常に彌陀實現せんことを。）

一切善本皆度彼岸

（彌陀致一の內面消極的）

悉獲諸佛無量功德、

（靈化の積極的方面）

智慧聖明不可思議

（彌陀同化の神靈態）（以下斷絕）

昭和四年四月十五日印刷
同　二十日發行
年七冊制は廢止
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）

編輯兼發行人　山崎辨成

東京市小石川區歐訪町五五
印刷人　小林七太郎
電話小石川一四九五

發行所　東京市小石川區水道端二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番